犬になったぼく

鱗岩　忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
犬になったぼく

【Ｎコード】
Ｎ００７４Ｚ

【作者名】
鱗岩　忍

【あらすじ】
ある日、ぼくは学校でひろった子犬と、心が入れ替わってしまう。動物が大嫌いなママは、ぼくを家から追い出すが・・・。。。

1　犬になったぼく（前書き）

この物語はフィクションですが、真実を描いています。

1　犬になったぼく

1　犬になったぼく

ぼくはタロウ。
でも、なぜだか分からないけど、ジロウになっちゃってるみたいなんだ。
わけが分からないって？
ぼくにだって、まったくわけが分からない。
自分自身の頭のなかを整理するためにも、順を追って考えてみよう。
まず、ぼくは小学三年生だ。
ごくふつうの町のごくふつうの小学生。
人より体が小さくて、列をつくって並ぶときには、いつも一番先頭に立つ。
クラスでは、いきもの係をやっている。
ふつう、係は入れ替わるものなんだけど、ぼくの場合はずっといきもの係だ。
学校では九官鳥を飼っている。
それからうさぎも。
にわとりも。
亀も飼っている。
ぼくはそういった小動物が大好きだ。
犬も好きだし、猫も好き。
でも、ママはぼくと正反対。
動物が大嫌いなんだ。
ぼくはうちでも犬を飼いたいと思っているが、ママが反対するからダメだ。
パパはぼくと同じ意見なんだけどね。

将来は獣医かペットショップの店員になりたい。
だから、いきもの係は将来のための勉強でもある。
学校の勉強は苦手だけど、こういう勉強なら全然苦にならない。

ある日の放課後、ぼくはうさぎ小屋の裏で一匹の子犬をみつけた。

まだよちよち歩きが抜けない小さな柴犬だった。
痩せて、ひどく汚れていた。
たぶん、学校の周りを流れるどぶ川に落ちたんだと思う。
抱いてみると、ちょっと臭った。
でも、ぼくには可愛くて仕方がなかった。
そこで、深く考えもせずに、家に連れてきてしまったんだ。
ママに見つかれば、捨ててこいと言われるだろう。
だから、ぼくはぼくの部屋に隠して飼おうと決めた。
ぼくは、この犬をジロウと名付けた。
ぼくがタロウだから、ジロウはぼくの弟分だ。
ジロウを見つけたときに、給食の残りのパンをあげたので、エサはまだやらなくていい。
だから、次にやるべきことは、ジロウを洗ってやることだ。
ママは、台所で夕飯の支度中だから、風呂場に近づくのは容易だった。
夕べの残り湯を洗面器にたっぷり入れて、ぼくは2階の部屋に向かった。
部屋ではジロウが隅の方で震えていた。
かわいそうに。
早くきれいにしてあげて、タオルにでもくるんであげなければ。
そう思って、ジロウを洗面器に入れた途端、世界が変わった。
少しめまいがして、目を閉じた。
次の瞬間、洗面器のなかに入っているのは、ぼくの方だった。

目の前には、ぼく自身が笑ってこっちを見ている。
天然パーマ。
度の強い眼鏡。
しもぶくれの顔。
生まれたときからおなじみのぼくの顔がそこにあった。
向かい側のぼくは、笑いながらぼくにこう言った。

「うまくいったぞ。今日から君は犬のジロウだ」

とても意地悪な笑顔だった。
ぼくは、すごく恐かった。
その笑顔を悪魔のように感じた。
なによりも、その顔がぼく自身だからもっと恐かった。
その場にいたたまれなくなって、洗面器を飛び出すと、半開きのドアに体当たりした。
そして、あわてて階段を下りると、途中から転げて滑り落ちた。

トントントン…。

体が小さかったから、あまり大きな音はしなかった。
でも、ママは物音に気付いて台所から出てきた。
ぼくは夢中になって、ママに駆け寄った。

「ママ、ママ！　大変だ。部屋に変な奴がいるよ」

ママはぼくを見ると、身を固くして立ち止った。
そして、ママに向かって飛び付いたぼくを、思い切りはねのけた。

「きゃん！」

ぼくはまるで子犬みたいな鳴き声を上げて、廊下に叩きつけられた。
骨が折れたかと思った。
それ以上に、ママの行動にショックを受けた。
ママにはぼくが分からないらしい。
玄関先の鏡には、今のぼくの姿が映っている。
そこに映っているのは、まぎれもなくジロウだった。
さっきぼくが洗面器に入れて洗ってあげようとしていたジロウ。
痩せて、泥まみれではあるが、クリクリとした可愛い目と、一回転した愛らしい尻尾を持つ柴犬のジロウだった。
立ち止まって鏡を見つめるぼくに向かって、ママは手許の箒を振り回した。

「ちょっとアンタ、出ていきなさい！」

箒の先が、ぼくの体に当たってチクチクした。
ママは、そうやってぼくを追い出そうとしたが、負けるわけにはいかなかった。
こんな状態で追い出されたら、大変だ。
はらぺこで力が出なかったが、右へ左へ箒をかわして、なんとか耐え抜いた。
しかし、2階から、ゆっくりと“ぼく”が出て来る。

「どうしたの、ママ。その薄汚い犬はなに？」

ママはその声を聞いて、“ぼく”に対してこう言った。

「タロウ、あんたちょっと手伝いなさいよ。この犬を追い出して」

この一言で、ぼくの気持は折れた。
ママにはぼくが分からない。

ママは、偽物の“ぼく”をぼくだと思っている。
そして、二人してぼくを追い出しにかかっている。
この事実を突き付けられたとき、ぼくはされるがままになった。
ママの箒に押され、“ぼく”の足に蹴られて、ぼくは玄関先から外へ転げ出たんだ。
今ぼくは、はっきりと分かった。
ぼくは犬になった。
犬のジロウになっちゃったんだ。

3　隣のチビ

これからどうしよう…。
訳が分からないままに追い出されてしまったぼく。
町の表通りをさ迷うが、どう考えても分からない。
気になるのは、あのときのジロウの言葉だ。

「うまくいったぞ」

…ってことは、これは罠だったってことだ。
あんなに可愛い柴犬が、ぼくを罠にはめるなんて。
しかし、ただでもあり得ないことが起こってるんだ。
常識で割りきれるわけない。
とにかくこれから先どうやって生きてゆくのか。
まずはそれを考えなきゃならない。
そのとき、お腹がグーッと鳴った。
さっき給食の残りのパンを食べたばかりだったけど、焼け石に水だった。
ジロウはどうやらここ数日なにも食べていないようだ。

「お腹が空いたなあ」

思わず口に出したが、実際に流れ出た声は、

「く～ん、く～ん」

という子犬の鳴き声だった。
食べ物を探さなくちゃ。
でも、のら犬というのは、どうやって食べ物を見つけるんだろうか。

猫ならすずめでもねずみでも捕りそうなものだけど。
第一、動物が大好きなぼくが、小鳥なんかを殺せるわけがない。
できれば、パンやごはんを食べたいものだ。
そんなことを考えて歩いていると、向こうから知った顔がやってきた。
ぼくの家の隣に住んでいるおばさん。
そこで飼われているヨークシャーテリアのチビだった。
ぼくはずっと犬を飼いたかったから、いつもおばさんがうらやましいと思っていた。
こんなに可愛い犬を飼えたらいいのにな。
いつもそう思っていた。
それで、チビのことは随分と可愛がった。
おばさんがいいと言わないので、食べものをあげることはできなかったけど。

「やあ、チビ。ちょっと相談があるんだけど」

ぼくはチビに近づいていった。
道の向こう側では、八百屋さんが大声で怒鳴っている。
今日は、大根が安いらしい。
おばさんは、八百屋の声に夢中だったから、ぼくがチビに近づいても気がつかない。
チビは、ぼくに気づくと、しかめっ面でこう言った。

「あんた、誰？」

ぼくは絶望的な気持ちになった。

「ぼくだよ。隣のタロウ。分からない？」

「タロウは人間だろ？　あんたは柴犬じゃないか」
「実は今日、柴犬を拾ったんだけど、どういうわけか心が入れ替わっちゃったんだ。こんなことって聞いたことある？」
「あるよ。知らないの？　ケケケ…」
チビは、意地わるそうに笑って言った。
「どういうこと？　よくあることなの？」
チビは、怪訝そうな顔をして、
「本当に知らないのか。　…ってことは、お前は本当にタロウなんだな！」
「だから、そうだって言ってるじゃないか」
ぼくは面倒になって声を荒げた。
実際に出た声は、
「ウー、ワンワンワン！」
という唸り声だったけど。
この声を聞いて、おばさんがこっちに気付いた。
「まあ、なんでしょう。この汚い犬は。あっちへ行って！　シッシッ！」
おばさんは太い足で、ぼくを追っ払おうとした。

チビは何かを知っている。
どうしても聞き出したかったけど、いまは無理そうだった。
おばさんの足蹴りにはとても敵わなかった。
そのとき、チビが叫んだ。

「知りたかったら、夜、うちに来て！」

それを聞いて安心した。
夜になったら理由が聞ける。
こんな状況に陥った理由。
それまで生きていればの話だけど。
町の人がこっちを見ている。
チビから離れたから、おばさんの追及からは逃れたけど、通行人は皆こっちを見ている。
早くここから離れなきゃ。
ひと目につかないように。
もう夕暮れ時だ。
夜までもう少し…。

3　チビが言ったこと

それから、ぼくは学校で待った。
他に、夜まで身を隠す場所を知らなかったからだ。
いきもの係はぼく一人だったから、例のうさぎ小屋に近づく生徒は滅多にいない。
しかも、ここからは、校庭をはさんだ向こう側に、校舎の大時計が見えた。
ぼくは、午後１０時を確認し、急いでその場から立ち去った。
まだ少し早いかもしれないが、ぼくがチビの家に着く頃には、家の人はそろそろ眠るころだ。
おばさんの家には、おばさんとおじさんしか住んでいなかったから。
若い人がいる家なら、もう少し遅くならないと安心できないけどね。
チビの家に行く途中、隣のぼくの家の前を通り過ぎた。
ここで今日、ぼくはママに追い出されたんだ。
思い出したらさみしくなった。
いまごろ、ぼくになりすましたジロウは、温かい部屋でおいしい夕食を食べ、お風呂に入ってゆったりとしているに違いない。
それにひきかえぼくは、泥だらけの毛は臭いし、体は疲れているし、はらぺこだった。
こんな不公平なことってあるもんか。
ぼくは果たして、もとの姿に戻れるんだろうか。
そんなことを考えているうちに、チビの家に着いた。
チビは座敷犬だから、室内のどこかにいるはずだった。
さて、どうやって話をしたらいいんだろう。
チビの家に着いたのはいいけど、どうしたらよいか分からなくて家のまわりをうろうろしていた。
すると、玄関の方から、押し殺したような低い声がした。

「タロウ？　そこにいるの？」
チビの声だった。
ぼくはうれしくなって、
「うん。いるよ。玄関の前だよ」
と返事した。
チビはあわてて、
「そんな大声出しちゃダメだ。今出て行くから待ってて」
と言い終わらないうちに、外に出てきた。
おばさんの家の玄関には、犬用のドアがついていた。
ふつうは、夜は鍵がかかってるんだけど、おばさんはよく忘れるらしい。

「ときどき、こうやって外に出て、夜の散歩をしてるんだ。さあ、近所の公園に行こう」
チビはそう言って、駆けだした。
ぼくもチビに尾いて走った。
４本足で走るのに慣れていなかったので、尾いていくのが大変だった。
でも、ここで見失ったら、どうにもならない。
ぼくは必死だった。
公園に着くなり、チビとぼくは、ベンチに飛び乗って話し始めた。
月明かりがまぶしいくらいに輝いていた。
「ぼくは一体どうなっちゃったの？」

ぼくはチビにそう聞いた。

「どうなっちゃったって、入れ替わったんだろ？　ええ～っと、その…なんとかっていう犬…」

「ジロウ」

「そうジロウだ。ジロウと入れ替わったんだね。よくあることだ」

チビは、どうってことないようにそう言った。
まるで、そんなことは別に珍しいことじゃないといった感じ。

「そんな話始めて聞いたよ。犬と人間の心が入れ替わったんだよ」

「そりゃ、入れ替わるにはいくつかの条件があるし、入れ替わった犬の方だって、もとには戻りたくないから、絶対に条件が合わないように気をつけるからさ。もとに戻った人間がいなければ、この秘密は公にされることはない。そうだろ？」

「そんな…」

ぼくは絶望的な気分になった。
チビに言わせると、こんなことは世界中で頻繁に起こっていることらしい。
ただ、一旦犬になって、元に戻った人間がいないから、この秘密は秘密のまま守られているというのだ。
もう何百年も前からそうだったらしい。

「だって、犬にとっちゃ、この世界はまったくやりきれないぜ」

「どうしてさ。チビなんて、おばさんに可愛がられているじゃないか」

「まあ、俺なんかまだいい方だね。それにしたって、いい歳して尻尾振ってご主人さまに媚を売らなきゃ食べていけないんだ。これはこれでなかなかつらいものがあるぜ。もっとも、この芸ができなきゃ、捨てられて保健所行きだけどな」

「保健所？」

「そうさ。保健所で殺されるんだ。噂によると、保健所じゃ、集めた犬をまとめてガス室に送るらしいぜ。昔は、人間同士でもそんなことやってた国があったそうだけどな」

「それで、その条件ってなんなのさ。犬と人間の心が入れ替わる条件って…」

確かあのとき、ぼくは洗面器でジロウを洗おうとしていた。
ジロウを両手で抱きあげて、ゆっくりと洗面器に入れ、改めてジロウの目を見たんだ。
次の瞬間、少しめまいがして、気がつくとぼくの方が洗面器に入っていた。
あの動作のどこが条件に合っていたんだろう。

「そうだなあ。水と太陽と動作、それから目を合わせることなんかが関係あるらしい」

「あるらしい？　チビは条件がどんなものだか知らないの？」

チビはうんざりしたように首を横に振りながら言った。

「それが分かっていれば、俺だって人間と入れ替わるさ」

水と太陽と動作、それに目を合わせること。
今の季節で、午後6時頃のぼくの部屋に入る日差しが、ちょうどいい具合だったんだろうか。
その他に条件はあるんだろうか。
事前に給食のパンを食べておくことなんかも入るんだろうか。
限りなく不安になってきた。
元に戻れる可能性は、ゼロに近いんじゃないだろうか。

4　うさぎの命令

チビと別れて、ぼくは学校に戻った。
他に行くところがなかったからだ。
結局、チビからは、一番肝心なことを聞き出せなかった。
どうやったら、ぼくが元に戻れるのか。
手掛かりは何一つなかった。
そこで考えたのは、そもそもの出発点に戻ってみようということだ。
つまり、学校のうさぎ小屋だ。
ジロウは最初、あのうさぎ小屋の裏でうずくまっていたんだ。
それに学校にいれば、給食の残りを分けてもらえる可能性がある。
ぼくにとっては、どうやって食べ物にありつけるかが心配だった。
今日一日いろんなことがあった。
ぼくはクタクタだった。
うさぎ小屋に着くと、すぐにまぶたが重くなった。
やっと眠れる。
そう思って、少しだけ気がゆるんだ。
うつらうつらまどろんでいると、ぼくの耳にひそひそ声が聞こえてきた。
それはうさぎたちの声だった。

「お父さん、あいつ、成功したみたいだね」

「そうだね。もし失敗していたら、ここに戻ってくることはないもんな」

「あの子、かわいそうだね。もう元には戻れないんだね」

「そうだ。もう元には戻れない。今のこの世の中じゃ、まず、あの

条件は満たせない」

ぼくは疲れ切っていたので、その声を聞くともなしに聞いていた。けれど、最後の言葉で目が覚めた。

「あの条件って…」

ぼくが元に戻れる条件のことだろうか。
それをうさぎが知っているのだろうか。
ぼくは飛び起きて、うさぎに話しかけた。

「条件って、もしかしてぼくが元に戻れる条件のこと？」

寝ていると思っていたぼくが、急に話しかけたので、２羽のうさぎはパッと駆けだした。
狭いうさぎ小屋のなかで、身を隠せる場所なんてなかったけど。
２羽のうさぎは父子だった。
子どものうさぎが僕に向かって、こう言った。

「条件なんて知らないよ。知ってたって教えてやるもんか！」

子どもうさぎの言葉を聞いて、ぼくは去年の冬のことを思い出した。
この子の母親は、去年の冬に死んだ。
お腹に毛玉がたまる毛玉病が原因だった。
毛玉病は、長い間小屋に閉じ込めていたりして、ストレスがたまったうさぎが必要以上に毛づくろいをすることによって起こる病気だった。
学校で飼われている以上、かかる可能性の高い病気だ。
でも、原因はそればかりではない。
母うさぎが死んでから調べたんだけど、たべものにも原因があるら

しかった。
つまり、毛がたまってしまう内臓のはたらきにも問題があるということだ。
栄養バランスが崩れたエサを与えていると、毛玉病にかかりやすい体になってしまう。
でもこれはあくまでも仮説であって、証明されたわけではないと、本に書いてあった。

「ぼくのお母さんは、おまえに殺されたんだ！」

子うさぎは、いきもの係のぼくが、母うさぎを殺したと思っているみたいだった。
母うさぎが死んだら悲しいだろう。
はっきりとぼくのせいとは言い切れないけど、誰かのせいにするとしたら、ぼく以外には考えられない。
それは理解できた。
だから、ぼくは黙ってしまった。
子うさぎも、それから黙りこくった。
父うさぎは、さっきから一言も口をきかない。
それからしばらくにらみあっていたけれど、ぼくは我慢できなかった。

「元に戻れる条件を教えてください」

ほとんど泣きだしそうな声だった。
父うさぎは、むずかしい表情でこっちを見つめていたけど、とうとう口を開いた。

「だめだ。教えられない」

それは深く悲しげな声だった。
おまえもつらいだろうが、私もつらいんだ、そう言っているような声だ。

「そんなにぼくを恨んでるの？」

「当たり前だ！」

子うさぎは叫んだ。

「もうやめなさい」

父うさぎは子うさぎにそう言ってから、ぼくの方を向き直した。

「申し訳ないが、わたしの妻が死んだのは、わたしは、君の飼育のせいだと思っている。世話を受けておいて言うのもなんだが、君のやり方はおかしい。はっきり言って早く別の人に代わって欲しかったんだ。だから、君が元に戻らない方が、わたしたちのためなんだよ」

父うさぎの言葉は、ぼくにとって相当ショックだった。
想像できるだろうか。
いきものが大好きで、学校中のいきものの飼育を一手に引き受けたぼくが、面倒を見てきたうさぎにこんなことを言われたのだ。
一瞬、元に戻るとか戻らないとか、そういうことが頭のなかから吹き飛んでしまった。

「そんな…」

ぼくはその場にへたりこんだ。

でも、これで引き下がるわけにはいかない。
なんとかして、元に戻る方法を聞きださないと。
ぼくは、なんとか力を奮い立たせて、父うさぎにこう言った。

「元に戻っても、二度と君たちの飼育係にはならないよ。約束する」

父うさぎはまた黙って考えていた。
赤い目がぼくを見つめている。
本当か、お前は約束を守れるのか、とそう問いかけているような目だった。
やがて、父うさぎは重い口を開けた。

「おまえが本当に約束を守るのか信じられない。もしかしたら元に戻ったが最後、わたしたちを殺すかもしれない」

「そんなことしないよ！」

ぼくは力いっぱい否定したけれど、父うさぎは答えなかった。
ただ、うるさそうにしかめっ面をして、ぼくの言葉を聞き流した。
そして、姿勢を正してこう言った。

「信用してもらいたいなら、わたしがいまから言うことをよく聞け。おまえと入れ替わったあいつのところへ行くんだ。そして、あいつに言って、自ら“いきもの係”を辞めると言わせろ。そうしたら教えてやるぞ。どうだ？」

なるほど。
確かに、ぼくの姿をしているジロウが、先生に「辞める」と言えば、ぼくはいきもの係を下ろされる。
自分で名乗りをあげて、いきもの係になったのに、今度は自分から

「辞める」なんて言ったら、二度とぼくはいきもの係をやらせてはもらえない。

「わかった。そうするよ」

ぼくは、父うさぎにそう約束した。

しかし、一体どうやって、ジロウに言わせようか。

疲れ切った頭をフル回転させて、ぼくは考えた。

5　チビの協力

ぼくは日の出とともに目を覚ました。
外で寝たのは初めてだったから、日の光がまぶしくて、とても眠っていられなかった。
うさぎの父子は、まだ眠っていた。
ゆうべ、父うさぎに言われたことはショックだったけど、いまは落ち込んでいる暇がない。
一刻も早くジロウに会って、いきもの係を辞めるよう説得しなければ。
ぼくは起き上がると、うさぎ小屋の裏を出た。
動くたびにお腹が鳴ったけど、いまは食事する気にはなれなかった。
歩きながら考えた。
ジロウをどうやって説得するか。
ふつうに話したら、その通りに実行するだろうか。
いや、そんなことはないだろう。
かえって、なにかおかしいと気づき、いきもの係に精を出すかもしれない。
それじゃ、放っておこうか。
ぼくは、いきものの世話が大好きだったから、いきもの係になったけど、あれは結構大変な仕事だ。
ジロウがそんな面倒なことをするかわからない。
いや、ダメだ。
たぶん、ジロウは、しばらくは生活を変えたりしない。
ぼくがやってことは、ぼくと同じようにやるつもりだ。
だって、入れ替わってから急に行動を変えたりしたら、怪しまれるから。
ぼくだったら、少なくとも何か月かは、いままで通りの生活をするだろう。

でも、ぼくはそんなに待っていられない。
毎日の食べ物を確保するだけでも大変だ。
何か月もこんな暮らし、していられないよ。
やっぱり、なんとかジロウを早めに説得して、父うさぎに、元に戻る方法を教えてもらわなきゃ。
どうやってジロウを説得しようか。
いけない。
考えが堂々巡りだ。
考えているうちに、ぼくはぼくの家に着いた。
隣はチビの家だ。
チビはあれから家に戻った。
きっと温かい布団のなかで眠ったんだろう。
そうだ。
チビは、頼んだら、エサを分けてくれるだろうか。
ドッグフードを食べるのはゾッとするけど、この空腹はひどい。
ぼくが入れ替わる前のことは知らないけど、きっと、もう何日も食べてないんだろう。
ぼくは、チビの家の前に立って、「く～ん、く～ん」と鼻を鳴らした。
チビはすぐに気づいて、玄関横のサッシから顔を見せた。
そして、ふっと姿を消してから、玄関のペット用ドアから飛び出してきた。

「来ると思ってたよ。エサが欲しいんだろ？　中に入れよ」

チビは、そう言うとドアをくぐった。
ぼくは急いでチビの後を追った。
家の中は薄暗かった。
電灯がついていないせいだ。
家の人がいないんだな。

だから、簡単にぼくを招き入れることができたんだ。
玄関を入って、廊下を抜けると、突き当たりに台所があった。
その片隅に、チビの小さな犬小屋がある。
毛布みたいな生地のハウスに、細い金柵が囲ってある。
その柵の入り口付近に、エサの皿が置いてあった。

「朝食を残しておいたんだ。よかったら食べなよ」

「ありがとう」

ぼくは、山盛りのドッグフードに勢いよく飛び付いた。
空腹だったこともあるけど、それ以上に、はじめて食べるドッグフードは意外においしかった。
人間だったときに食べたらきっとおいしいとは感じなかったんだろうけど、いまは犬の舌を持っているから、おいしく感じるんだろうか。
ずっと空腹だったせいもあって、ぼくはチビのドッグフードをペロリと平らげてしまった。

「ごめん。ぜんぶ食べちゃった」

「いいんだ。ぼくはまたもらえるから。ところでこれからどうするの？」

「うん…」

ぼくは、チビに、父うさぎから聞いた話を伝えた。
そして、できれば協力してほしいと訴えた。
チビは快く協力すると言ってくれた。

「ありがとう。きみはなんていい奴なんだ」

感動してそう言うと、チビは首を横に振って、こう答えた。

「違うよ。別に善いことをしようと思って言ってるんじゃないさ。ぼくだって、人間になりたいのさ。その方法が分かれば、ぼくにもチャンスがあるじゃないか。だから協力するのさ」

そうか。

確かにそれは言えている。

どこかでまた誰かが犠牲になるのかと思うと、穏やかな気持ちではいられなかったけど、いまはそんなことを言っていられない。

とにかく元に戻らなくちゃ。

それにしても、どうやってジロウを説得しようか。

ぼくが近づいたら絶対にダメだ。

昨日されたように、ほうきで叩かれるに決まっている。

チビに相談すると、深く考え込んでから言った。

「それについては、ぼくに考えがあるんだ。でもな…」

「でも?」

「少しばかり危険をともなう方法だ。君にできるかな」

「やるよ!」

ぼくは場違いなくらい大きな声で叫んだ。

ぼくは一刻も早く人間に戻らなくちゃならない。

そのためには、少しくらい危険な目にあうことなんてなんでもない。

ぼくがそう伝えると、チビはおそるおそる話し始めた。

6　作戦開始

1時間後、ぼくはまた学校にいた。
朝、家を出たジロウを追ってきたのだ。
当たり前のことだけど、ジロウはランドセルを背負って、おとなしく学校に行った。
新しい生活を始めるにあたって、目立った行動はしないはずだ。
たぶんしばらくの間は、何食わぬ顔で学校に通い、何食わぬ顔で生活するんだろう。
それから先はどうするか知らない。
でも、わざわざ人間になったんだから、やりたかったことがあるに違いない。
ぼくは、校門の隅から、ジロウのいる3年生の教室辺りをにらんだ。
絶対にもとに戻ってやる。
そのためには、ジロウに飼育係をやめさせなければいけない。
そして、父うさぎに、元に戻る方法を教えてもらうんだ。
ジロウはもしかしたら、いきもの係なんかやりたくないのかもしれない。
誰もが動物好きとは限らないから。
それにしても、しばらくはやっぱりいきもの係を続けるだろう。
目立たないために。
この状況で、どうしてもジロウがいきもの係を辞めざるを得ない方法があった。
チビが考えた方法だ。
しかし、それはすごく危険を伴うやり方だ。
しかも、ぼくがそれをやりおおせる可能性はすごく低い。
考えるだけでこわいんだ。
だから、ここでこうして様子を見ている。
ジロウが自発的に辞めると言わないかと思って。

そのとき、背後に人の気配がした。
ぼくのいる場所が影で暗くなる。
ギョッとして振り返ると、そこには幼稚園に行く前の小さな女の子がしゃがんでいた。

「わんわん…わんわん…」

片言にそう言うと、ぼくの頭を撫で始めた。
女の子の向こうには、お母さんが立って見ている。
ぼくも小さい頃こんなだった。
動物が好きだったから、どこかで犬なんか見かけると寄っていって撫でた。
お母さんは動物嫌いだったけど、ぼくが犬を撫でるのを許してくれた。
お母さんは飼うのが嫌いなだけで、動物そのものを憎んでいるわけじゃなかった。
ぼくがおとなしくしていたので、女の子は調子にのってぼくを抱き上げようとした。
ぼくの真正面から、両手をぼくの胴にまわしてそのまま持ち上げる。
このやり方だと、結果的にぼくは逆さになってしまう。
次の瞬間、思ったとおりに逆さになって、ぼくは頭から落ちた。
低い位置から落ちたので、大した衝撃はなかったけれど、いやなものはいやだった。
そこで、女の子が再び同じことをしようと伸ばした手をぼくは思い切り噛んだ。
女の子のお母さんが先に気づいて、ぼくを押しのけた。
ぼくは1メートルくらい飛ばされた。
少し遅れてから、女の子は事態に気づいて泣きだした。
ものすごい泣き声だった。
女の子のお母さんは、女の子の手を見ながら、悪態をついた。

こんな子犬が噛んだくらいで、たいした傷になるわけがなかった。
しかし、そのお母さんは、真っ赤になって怒って、女の子を連れてその場を立ち去った。
ちぇ…なんだい、あれくらいのことで。
ぼくは腐って校舎を振り返った。
いくつかの教室から、何人かの生徒や先生がこっちを見ていた。
まずいなあ。
目立っちゃダメだ。
あ…ぼくが見ている。
いや、ぼくじゃない。
ぼくになったジロウだ。
ジロウが3年生の教室から、こっちをジッと見つめていた。
ジロウははっきりとぼくを見ていた。
すごく警戒しているだろう。
当分ボロを出さないと思う。
かくなる上は、やっぱりあれを実行するしかなさそうだ。
気は進まないけど仕方ない。
ぼくは、その場を立ち去った。
そして、学校のまわりに張り巡らされた塀を伝って、裏門まで来た。
裏門周辺には、ぼくがずっと世話してきた動物たちが多い。
小さな池のなかには、たくさんの金魚が泳いでいる。
あのなかには亀もまじっているんだ。
うさぎ小屋はここからは見えない。
池の向こうには、高さ２０センチほどの囲いがあって、そのなかで鶏を飼っている。
ぼくは、裏門を通って、その囲いまで向かった。
鳥の囲いの前に立つと、意地悪そうな目つきの雄鶏が2羽こっちを見ていた。
「おい、チビ助。見てんじゃねえよ。あっち行け」

２羽の鶏のうち、体の大きい方の鶏が言った。
こいつはジョンって名前なんだ。
ぼくが名付けた。
ちなみにもう１羽の体が小さい方はメリーだ。
両方とも雄鶏なんだけどね。

「おい、ジョン。よく聞けよ」

ぼくはできるだけ押し殺した低い声でそう言った。

「なんだよ。俺の名前を知ってるのか。お前誰だ？」

「誰でもいい。それより、今から俺が言うことをよく聞くんだ」

ぼくは、生まれてはじめて「俺」と言った。
少し恥ずかしかったけど、この場合、「ぼく」じゃ格好がつかない。

「昼休みには、いつものようにタロウが餌をやりに来る。そしたらタロウを思い切り突くんだ」

「何言ってんだ、こいつ。いきもの係のタロウをか？　確かにあんまり好きな野郎じゃないがな。それでも餌をくれる人間だぜ。どうして突かなきゃならないんだ？　なんなら、お前を突いてやろうか？」

「できるもんならやってみろよ！」

ぼくは、思い切りジャンプして、囲いのなかに飛び込んだ。
囲いは高さがたった２０センチしかないとはいえ、今のぼくの体の

大きさからすると、ギリギリのジャンプだった。
中に入ると、そのままジョンに体当たりした。
ちょっとでも休んだりしたらダメだ。
いくら相手が、一度も外に出たことのない弱虫だったとしても、いまのぼくは痩せこけた子犬だ。
息をつかせぬくらいの勢いで、一息にやらなきゃこっちが危ない。
ジョンが倒れた隙に、その首にかみついた。

「ココココ・コケー！」

めちゃくちゃに騒ぐジョン。
ぼくは手を緩めなかった。
ジョンの羽に、尾に、連続して噛みつき続けた。
ジョンの体中に、血の斑点が出来始めた。
あまりやっちゃマズイ。
異変を感じ取られちゃいけない。
そのうち、ジョンが音を上げた。

「わかった。降参するよ。なんでも言うこと聞くから勘弁してくれ」

やった。
作戦の第一段階が成功した。

7　誤算

それから、ぼくは鶏の柵の近くに潜んでいた。
ジョンをしっかりと見張っていないと。
ぼくがジョンに命じたことは、ジョンとメリーにとって、死ぬかもしれない危険なことだった。
ぼくは、ジョンに「餌を食べるな」と命じたのだ。

ジロウは、いつもぼくがしているように昼休みに鶏の柵のところへやって来た。
そして、餌袋をひっくり返して、餌箱をいっぱいにした。
ジロウは、黙って作業していた。
一人きりになっても、ボロを出すような真似はしなかった。
敵ながらあっぱれだ。
なぜか、いきもの係の作業にも慣れていた。
もしかしたら、ぼくが作業するところを研究していたのかもしれない。
今回のことは、何日も前からじっくり練られていたのかもしれなかった。
ジロウは、池の鯉と亀にも餌をやると、うさぎ小屋の方へ消えて行った。
ジロウがまったく見えなくなるのを見計らって、ぼくはジョンのもとへ近づいた。
ジョンはじっと餌箱を見つめていたが、ぼくに気づくと、おびえてこっちを見た。

「手をつけてないぞ」

そう言うと、背後のメリーに顔を向けた。

「メリーだけは食べちゃダメか？」

そう懇願したが、ぼくは許さなかった。
ジョンだけじゃ効果がない。
ぼくは再度、鶏の柵のなかに飛び込むと、餌箱を引きずって、柵の外へ出した。
そしてそのまま裏門から出て、道路わきの下水路に中身をぶちまけた。
ジョンの餌は、ものすごい勢いで、下水路を流れていって、すぐに見えなくなった。
これでいい。
ぼくはまた餌箱を引きずって、ジョンの目の前に置いた。

「殺すつもりはない。ただ、しばらく弱ってくれればいいんだ」

何日かして、餌箱が空っぽで、鶏が2羽ともぐったりとしていれば、ジロウの責任になるだろう。
それが、チビの立てた作戦だった。
他の動物では、うさぎは大切な交渉相手だから、危険な目に合わせるわけにはいかなかった。
しかし、うさぎ以外に餌を自由にできない。
かわいそうだが、鶏のジョンとメリーが適役なのだ。
それでも、ぼくだってもともと生き物が大好きで、いきもの係をやっていたんだ。
いくらなんでもジョンとメリーを殺すつもりはない。
そこで、この作戦には期限を設ける必要があった。
一週間。
それが、ぼくが決めた期限だ。
それ以上、鶏が餌なしで過ごすのは危険だと思う。

特にジョンとメリーは、それなりに年をとっている。
ぼくが入学したときにはとっくに学校の主みたいになっていたから、生まれてから6年くらいは経っていそうだ。
鶏の寿命は8年～10年くらいだから（もっとも30年生きた鶏もいたそうだけど）、いい感じで年をとっている。
若い鶏にくらべて体力も落ちると思うので、一週間以上何も食べなかったら、もしかしたら死ぬかもしれない。
それはギリギリの期限だった。
また、ぼく自身の生活を考えても、あまり長期間今のままというわけにはいかなかった。
食べ物はチビが運んでくれるそうだけど、いつまでも世話になっているわけにはいかないだろうし、隠れ場所だって、いつ見つかるか分からない。
できることなら、できるだけ早く作戦を成功させたかった。
そういうわけで、ジョンとメリーにはかわいそうだけど、一週間は、水以外何も食べないで生活してもらうしかなかった。

この一週間は、ぼくは怯えきって暮らした。
学校の勉強さえしていれば、毎日ご飯が食べられる生活が懐かしかった。
今は、こそこそと隠れて寝て、朝まだ日が昇るか昇らないかのうちに、チビの家に行って、食事をめぐんでもらった。
何日か経った頃、チビの飼い主であるおばさんが、異変に気付いた。

「おかしいわね。チビちゃん、そんなにたくさん食べる子だったっけ？」

当たり前だ。
2匹分の餌がいっきになくなっているんだ。
あまり長くこの生活は続けられないぞ。

1日また1日と経過していった。
そして、一週間経って、鶏の柵になかを覗いて思った。
ぼくは忘れていたんだ。
年をとって、卵を産まなくなった雌鶏は、断食させられることがある。
一週間くらい断食すると、かえって鶏は元気になって、また活きのいい卵を産むようになるそうだ。
ジョンとメリーに世話をするにあたって、理科の先生に聞いたことがある。
もちろん、体力の低下している雌鶏が死ぬこともあるけど、1万羽の鶏に対して、せいぜい200羽くらいだという。
その他の9800羽は、羽のつやもよくなり、卵も殻が丈夫な若々しい卵を産むようになる。
あのときは、年老いた雌鶏に卵を産ませる話として聞いていたので、すっかり忘れていたけれど、元気になるかならないかという話なので、雄鶏だって例外じゃないはず。
その証拠に、目の前のジョンとメリーは明らかに若返っていた。

「よう、子犬。また来たか」

ジョンは、ぼくをにらみつけて言った。

「なんだか知らないけどさ、腹がペコペコで死にそうなんだけど、なぜか体の動きはいいみたいなんだ。そこでね、そろそろ餌を食べたいなと思ってるんだよ。今ならお前なんかに負ける気がしないんだ」

ジョンの目が光った。
確かにそうかもしれない。
闘鶏という競技があるくらいだ。

鶏のするどいクチバシは侮れない。
特に今のジョンの動きはきびきびしていた。
ぼくのような子犬にとても敵うような相手とは思えなかった。
それでも仕方ない。
ほくはジョンと戦わなくては。
もう時間がない。
いつまでもチビに餌を都合してもらうわけにはいかない。
この作戦が失敗したら、一生犬として生活していかなければならない。
そんなの絶対にイヤだ。
ぼくは鶏の柵のなかに入った。

「やるつもりだな」

ジョンは自信たっぷりだった。
おそらくぼくが来る前に、充分トレーニングしたんだろう。
ぼくは、いきなりジョンに噛みつこうとしたけれど、軽くかわされて、その代わり後頭部を思い切り突かれた。
めまいがした。
立っているのがつらかったけど、振り返ると、うつむいたまま突進した。
頭のてっぺんに激痛が走ったけれど、無視して突っ込んだ。
そのおかげで、ジョンはよろけて倒れた。
しめた。
ぼくは休まずに、ジョンの上にのしかかり、右足でジョンの首根っこをおさえつけた。
そのとき、ジョンを踏みつけた右足に激痛が走った。
見ると、メリーが思い切りぼくの右足を突いていた。
ふだんはおとなしいメリーだったけれど、断食してイラだっているみたいだった。

これもぼくの誤算だ。
ぼくは2羽を相手に戦わなくちゃならないのか。
よろけたぼくに、ふたたびジョンが襲いかかる。

「あ」

次のジョンの攻撃で、ぼくの右目が見えなくなった。
ジョンのクチバシがモロに入ったんだ。
顔全体が熱かった。
とても戦ってはいられなかったので、ぼくは飛びのいて柵を出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0074z/

犬になったぼく

2012年1月6日17時54分発行